

傷寒門

◆ 傷寒兼脳膜炎

塩山城西の八里庄出身で60歳になる啓蒙塾教員・李淑顔が、季冬〔陰暦12月〕に傷寒兼脳膜炎〔髄膜炎〕になった。

病因：もともと頭昏証があり、上焦に熱が出るたびに意識がすぐに混濁した。12月末にたまたま風寒に冒され、病が陽明に伝入して邪熱が内熾して脳膜炎を生じ意識不明になった。

証候：それまでの医者とは手順どおりの治療をせず、初期に解表しなかったののでついに傷寒が裏に伝入して陽明腑実になった。舌苔は黄で黒味を帯び乾いた砥石のようで、舌を伸ばして口の外に出すことはできず、ひっきりなしに譫語し、まったく意識がなく両目は直視したまま瞬きもない。脈を診ると両手に筋惕不安〔筋肉がびくびく動く〕があり、有力に似るが実ではなく1息5至で、大便は4日出ておらず小便失禁がある。

診断：これは病実脈虚の証である。気血が虧損して外邪に抵抗しがたいため種々の危険な症状があらわれている。舌苔の黒乾は、陽明熱実で津液が上潮しないため、両目直視して瞬きがないのは、肝火の上衝で目が脹るため、両手の筋がびくびく動くのは、肝熱で血が虧耗して内風が発動寸前にあるからで、譫語して意識がないのは、外感邪熱が過盛になると当然意識が混濁するが、さらに外感邪熱が上蒸して髄膜炎をおこし中枢神経に波及したためである。白虎加人參湯にさらに真陰を滋補する薬物で助けるとすべて治癒する。

処方：生石膏（細かく搗く）5両 生地黄2両 野台参8錢 天花粉

8 銭 北沙参〔浜防風〕8 銭 知母6 銭 生白芍6 銭 生山薬6 銭 甘草
4 銭 荷葉辺1 銭

合わせて茶碗3杯に煎じ3回に分けて温服し、毎回茶碗1杯に生鶏子黄〔卵黄〕2個を混ぜる。方中に粳米を用いないのは、和胃は生山薬で代用しているからで、生鶏子黄は肝風の内動を熄し^けさるためである。荷葉〔ハスの葉〕は形が仰向きにした盂〔つば、鉢〕のようで震〔㊦〕をあらわし、荷梗〔ハスの葉柄、花柄〕は中空で亭々と真っ直ぐにのび、さらに水面の酸素を最も豊富に得るので、涼薬の力を引いて胸中に直達させて髄膜炎の炎症を清す。

再診：方法どおりに煎じて服用すると翌朝大便が1回あり、舌苔の乾燥がやや癒えたがやはり津液はなく、意識はややはっきりしたが譫語はあった。目の直視はなくなり瞬目もできた。脈を診ると筋惕は大半癒え、至数は前より緩徐で、浮分はこれまでほど有力ではなく、重按すると逆にこれまでより根があり、これらはすべてよい兆候である。そこで前方にやや加減をして余熱を清し、真陰を回復させて全快をはかった。

処方：生石膏（細かく搗く）4両 生地黄2銭 野台参8銭 枸杞子1両 生山薬1両 天花粉8銭 北沙参8銭 知母6銭 生白芍6銭 甘草4銭

合わせて茶碗3杯に煎じ、大便がすでに通じたので、数回に分けて徐々に温飲し、1度に1口ずつ飲むようにさせた。

効果：10時間で薬を飲み終えると意識がはっきりして、諸症状もすっかり癒えた。

説明：髄膜炎証の治療には羚羊角が最適で、筋惕不安治療にも羚羊角が最適である。上で頭脳を清し、下で肝風の萌動^けを熄し^けさる。しかし、羚羊角はきわめて高価で、僻地の薬局には本物が少ないので方中には使用していない。さらに本証では髄膜炎を併発するが、臓腑の邪熱の上蒸によるので、その邪熱を清すれば髄膜炎はおのずと治癒し、必ずしも清脳を重視しなくてもよい。

問い：筋惕症状について、西洋医学では中枢神経失調による運動障

害で、髄膜炎によくある痙攣・ひきつけ・角弓反張などの症状はすべて筋傷の類で、髄膜炎が神経に波及するためであるという。ここでは肝経血虚有熱によるというが、西洋医学の説は信ずるに足りないのか？ **答え：**この2説は本来相互につながりがある。脳髄神経〔中枢神経〕はもとも脳気筋といい、灰白色の細い筋である。全身の筋はすべて肝が主るので、脳髄神経と肝の関係はきわめて密接である。肝が損傷を受けると、脳髄神経は必ず失調し、西洋医学でいう神経症の多くは方書の肝経病である。さらに方中には引経薬に荷葉辺を用い、他の涼薬を引いて上行させ脳を清するではないか。

◆ 傷寒脈閉

天津東門裏の麵粉庄理事で38歳の張金鐸が季冬〔陰暦12月〕に傷寒証にかかり無脈となった。

病因：10日前に風寒に罹り医者の治療で治癒したが、そのまま用事で遠くに出かけてまた風寒にかかりついに本証になる。

証候：身体の内外ともに寒気がして、頭痛があり呼吸に微喘があり、身体はわずかにふるえ、六脈すべて触れない。

診断：もともと身体が弱いところに、感冒が重なって風寒が深く入りこんで経絡を阻塞したために脈が閉塞した。治療は麻黄湯にさらに大量の補気薬を加え、正気を補って逐邪外出すれば奏効する。

処方：麻黄3銭 生黄耆1両 桂枝尖2銭 杏仁（皮を去る）2銭 甘草2銭

先ず麻黄を数沸煎じて浮いた泡を除き、さらに残りの薬を入れて大茶碗1杯に煎じて温服し、布団で覆^{おお}って微汗を出す。

効果：服薬後全身に汗が出ると、脈がすぐにあらわれ諸症状はすべて癒えた。

説明：本証は少陰傷寒ではないかという疑問もある。少陰傷寒は脈が微細で、微細が極端になればなくなることがある。私が太陽病として治療したのは、頭痛・微喘・寒戦がすべて太陽経の症状で、少陰証の「蹠

臥」し、「ただ寐ねんと欲す」症状がないからである。そこで麻黄湯中に黄耆を大量1両加え、麻黄・桂枝のはたらきを助け扶正逐邪した。

◆ 傷寒脈閉（2）

天津の河北耀華織布工場の14歳になる李姓の学徒が傷寒脈閉証になった。

病因：左肋下にもともと鬱気があり、動くとすぐに痛んだ。ある日動くとはげしい痛みで頭に汗が出て、その汗が引かないうちに外出して風寒に冒されついに本証になった。

証候：頭が痛み身体が冷えて、悪寒があるが汗が出ず、心中に熱感があり、六脈がすべて閉塞した。

診断：もともと肋下に痛みがあり身体は羸弱^{るいじゃく}である。さらに汗が出ているときに風寒に冒されると、風寒が必ず深く入るので脈が閉して身体が冷える。また肋下にもともと鬱気があるので肝胆の火は必然的に鬱滯しており、風寒の外束で鬱した火が激動して心中に熱感を生じる。治法は發表薬を主にし、清熱理鬱薬と補正薬で助けるとよい。

処方：麻黄2銭 玄参6銭 生山薬6銭 野台参2銭 生鶏内金2銭 天花粉5銭 甘草1.5銭

まず麻黄を煎じて数沸させて浮いた泡沫を除き、さらに残りの薬物を入れて大茶碗1杯に煎じ温服して汗を取る。汗が出なければ、アスピリン1gを服用して発汗を助ける。

効果：服薬後2時間で全身にわずかに熱感があり汗が出そうで出ないので、アスピリンを服用すると間もなく全身に発汗した。翌日再診すると脈があらわれたが5至無力で、すでに悪寒はないが心中にはまだ熱感があるので、麻黄を除き玄参・山薬いずれも1両にして3剤を服用させたとところ、心中の熱感がなくなったので玄参・天花粉を半減しさらに数剤服用させて病後の養生をした。